

畑作の低収穫で自給自足すら不足する不安定さが村発展を「はばみ」子孫に残すような記録が無いのが当然なことながら、生活の余裕もなければ、又、昔の人々のほとんどは文盲であつたらうし、自分の名すら書くことが出来ない村人であれば、今、私が期待している資料が出てこないのも当然である。

中柏木の村の由来は柏の木の子孫する地帯で（植物学上では柏の木は古生木）あり、柏木と名のつく村落は当時三つあり、其の中心に位置するから「中柏木」で、旧喜良市村に柏木と言う地名があり、中柏木の南方つまり飯詰と中柏木の中間に柏木と言う名の集落が存在したが、何んらかの変動で廃村の憂き目に会つたのか？、又、村が起きると村落の和と信仰を託した祭祀の場所が必要で古代においては発祀と政治が一致し、区別のつかない連携の姿をとっていたと言ひ、開村から中世の中柏木においてもその傾向が強く神社は政治と一体をなしていたと考えられる。

中柏木の産土神は磯崎神社であるが、磯崎とは磯と崎にある海を連想するのが当然であるが、必ずしも塩からい海辺でなくても海に連なる水辺でも海神、水神につながる。又、中柏木の場合十三湖につながる水辺に建立したのが中柏木城跡の中に磯崎神社が、中柏木の守り神として鎮座していた。

その昔、仮名柏木の人が、山仕事の為に山に出掛けていたが、留守中に妻が産気付いて困っていたが、知らない見たことも無い若い女が来て親切に手伝ってくれ、山仕事から主人が帰宅し

根通りを歩いて旅人は忌来市で一休みして小泊街道に抜けたと言ひ、往時の忌来市は大変に賑わつたと思ふ。

伝承に依ると、往昔に忌来市の狩人が動物を追つて行った所、黒い「衣」を身体に着けた武者らしい屈強そうな大男が現れ「ここはお前達のくる所でない、高貴な人の住む土地だ、早速、立去れ」と大声で叫び、大木の枝を折つて追い払つたと言ひ。

狩人は、それから、此処へ「来るのを思うのかと思ひ込んだと言ひ、藩制以前の往昔には忌来市の集落を只だ「市」と呼んでおつたと言ひ説もあつた。（喜良市の元助役、近藤千九吾氏談、故人、親戚だつたので私が子供の頃に私の家に遊びに来て昔話を知らされた）

狩人はそれからここへ「来るのを思う市」だから「忌来市」と言ひようになつたと言ひ説もあるが、役人が検地の際に忌来市の字義は縁起が悪いと言ひ、寛文十二年（市六七二〇三二八年前）に喜良市と地名が改められたと言ひ「喜はヨロコビ」「良は正しく優れ」「市は人が大勢集まる」と解し地名に相応した土地柄だと思ふ。

今でも喜良市の湯ノ沢には地藏堂や五輪塔があり湯の沢は硫黄分を含んだ鉱泉が湧いており、普段は勿論だが今でも旧三月二五日には湯の沢の地藏堂に沢山の老若男女で賑わつている。又、湯ノ沢には大きな山百合が育つているが時期がくるとみごと山百合の花が咲くが、この山百合を採ると不思議にも悪い事が起きると伝えられている。

たので、すぐこの事を知らせたらその晩に夢に現われ「吾れは苗代沢の草薙に埋まって居る七面大天女である、吾れを草薙から揚げて祀ると安産の守り神になるであろう」という夢を見たので翌朝、早速、苗代沢に行くと草薙の中から「かすかに光を放つた一個の小さな物体が見つかったので、早速光る物体を持ち帰り鎮座して祀つたと言ひ。

これが七面大天女で俗に言う七面様だと言ひ説がある。其の数十年後に磯崎神社から二百米位離れた小高い山に立派な七面大天女神社と大鳥居が新築された。

中柏木城は、応永二六年（一四一九）南部守行による攻撃に会つて廃城となつたが、神社跡には薬師様を永らく祀つたと伝えられた。

磯崎神社は茅葺（チヂキ）（木でふいた屋根）の建物で中は暗く明り取りは部（日光や風雨をさえぎる戸）を利用した建物だったが大正二年に惜しくも全焼、ご本尊も焼失し、現在のご神体は黒石方面から買い取り、現在の神社を新築して祀つた。（中柏木の集落の地名は字義の通りと思ふ）



喜良市は天文年間頃に（一五三二〇四六八年前）忌来市とある。往昔には藻川あたりは沼沢で湖水が入り込んでいたと言ひから飯詰や中柏木、木良市の山

喜良市の村社、熊野宮は天正十二年（一五八四〇四一六年前）再建で藩制前の開村と言ひ、貞亨四年（一六八七〇三三三年前）には田、二三町九反二畝、畑五〇町四反、田畑屋敷合わせて七四町三反と言ひ。

又、熊野宮の祭神は伊邪那岐美命、事解男命、素盞鳴命、倉稻魂命、大己貴命、少名彦命、水波女命、それぞれの各「命」を神霊として祀つて居るが、祭日は旧六月十五日、四月三日神楽、九月三日祈禱とあるが正徳四年（一七一四〇二八六年前）延享元年（一六八七〇三三三年前）安政二年の棟括が記録されていると言ひ。

貞亨四年（一六八七〇三三三年前）の検地帳には木社、棚草（カササギ）木でふいた屋根、建坪東西三尺八寸、南北四尺、一間半に二間の拝殿、神楽殿、東西二〇間、南北三八間の境内林があつたと言ひ。

その外に未社として文化元年（一八〇四〇一九六年前）に棟払いをもつ神明宮、文化十三年（一八一七〇一八三三年前）に喜良市村の源左エ門（当時平民には苗字が無かつた。苗字が許されたのは明治四年）建立の金毘羅宮があつたと言ひ説もある。

又、昭和四〇年（一九六五〇三三三年前）に調査されたが、旧石器、後期の遺物が多数発見されたと言ひ、遺物は珪質頁岩、加工尖頭器、彫器、石核等多数の遺物が発見されたと言ひが道路掘削により一部が破壊されたと言ひ。

忌良市は寛文拾二年（一六七二〇三二八年前）に喜良市とあ

らためられた。



小栗崎

古書から推すと小栗崎の年代成立は古く約四〇〇年以前と考えられるが、往時の小栗崎は散在的に人家が有り、突出して居る平坦地の崎には栗の木が繁茂林立して居り、秋には小粒の栗の実が平坦地の崎に鈴なりに稔ると呼ぶ様になったが誰言うとも無く自然に小栗崎と呼ぶ様になったと言うが字義の通りであると思う。

栗の害虫である「栗玉蜂」が往時に発生し、栗の木の葉に栗玉蜂が「虫瘤」の巣を作り養分を奪い、栗の木が自然に枯れて全滅したと言う説があるが、小栗崎は小さな栗の実が突出して居る崎に鈴なりに稔っておったことから小栗崎と地名が名付けられたとの説がある。又、小栗崎には薬師様があり、薬師神社は神仏混交の名残りで薬師瑠璃光如来で立山通称「観音山」に祀ってあるが薬師神社は明治四〇年（一九〇七）九三年前までは現在の東町（元リンゴ園跡地は「ダクの競馬場」の敷地）であった。

蔵様があったと言う。

又、川倉は明暦（一六五五）三四五年前（一六五八）三四二年前）年間に開かれたとの古老の説であるがそれ以後の天和（一六八一）三一九年前）年間に川倉の集落は完全に出来上がった。

往時の川倉の創建は正保年間ともあるが（一六四四）三五五年前）開村はそれ以前との説もある。

今から三一一年前の元禄十六年（一六八九）三一一年前）に津軽領域は日照不足と北東風で冷害が相次ぎ大凶作で農民は貧窮の「どん底」に落ちて悩んだが、津軽四代藩主、信政は津軽平野の治山治水に全力を傾注し、又、貧困を軽減しようと津軽内の特産品を考慮し、その一策として享保二年（一七二六）二七四年前）漆木栽培を命じ奨励したと言う。

当時の川倉は茫々たる原野であったが漆木植樹本数は飯詰（喜良市二千五百本、嘉瀬二千三百本、川倉三百五〇本を植えたと言うが、文久二年（一八六二）一三八年前）中谷甚六が川倉の漆仕立役を被下され「苗字と帯刀」を許されたと言う。

文化二年（一八〇五）一九五年前）長富（五所川原市）嘉瀬、川倉に、各堤防が築堤されてから人々は堤防の上を歩く様になり、長富、嘉瀬、川倉の道程が短縮されたが、五所川原から長富にいたる嘉瀬、川倉の往時の狭かった道も明治十八年に拡張され、完全に着工整備されたのは明治四三年に出来上がったと言う。

明治四〇年以前の旧四月八日には乗馬が盛大に催され「ダク」と言う乗り方で、背中に旗を立てて走ったと言うが、近郷近在の見物人が黒山の如く集まって賑わったとの言い伝えがある。いずれにしても小栗崎は小さな栗と突出している崎で「小栗崎」の地名が名付けられ字義の通りであると思う。



川倉を探る

川倉の賽ノ川原は藤枝溜池に突き出た丘陵であるが、丘陵の平坦地に地蔵様の立派なお堂が老松に囲まれて立って居るが、農閑期の旧六月二十三日二十四日にかけて祭礼は大賑わいで、ソバ屋、飲み屋、土産物、花火店、其の他の店の出店が小屋がけて、人の波は前進出来ない程賑わうが、巫女が松林に陣を取って居る、昔は北海道や秋田県からも参詣人が来たと言われている。

参詣人は地蔵様を拝み巫女の口寄せを聞き亡き父母、夫、子供や兄弟に先に行かれた人々、これらの人々は巫女の口寄せをする言葉に熱心に手を合わせて聞く人、一心不乱に聞き、余りの悲しみに涙を流す人々、巫女の口寄せを現代の若い人々は迷信だよと一笑するかも知れないが先に立たれた人（亡）を想うのが人情だと思ふ。

伝承に依ると享保（一七七六）二八四年前）の頃から川倉地

中谷甚六は漆木栽培管理の為に飯詰、木良市、嘉瀬に勝るとも劣らない策定を練り、村人を使役し「漆」の原液や漆の精製品、その他を保管管理の為に往時としては珍しい「大きな倉を建立した」と言うが、川倉の集落は前述の通り「川と倉」を取り入れ、集落の「地名」にしたとの説もあるが字義の通りであると思う。

川倉の西側にある祭り神宮社は大山祇命、大国主命、水波女命、各三命を祭神として「三柱神社」として祭って居るが四月十日神楽執行、又、津軽三代藩主、信義が正保年間に津軽統一までの戦没者の供養と川倉開拓に汗を流して亡くなった人々の供養の為に川倉観音を勧請したと言うが弥陀、薬師、観音などの三柱が明治四年（一八七一）二二九年前）に三柱神社と合祀されたと言う。



藤枝

藤枝は元禄十一年（一六八八）三二二年前）頃からの開拓地であった。往時には桜井村であったと言うが、戸数は数軒より無かったが藤枝にある保食神社の境内の周りには見事な大きな藤枝の株が数十本、所々に散在して生えて居り花房が垂れる頃には見るからに美しかったと言うから、享保十二年（一七二七）二七三年前）桜井村を改めて、

隣接の芦辺村と明治九年（一八七六―二四年前）に合併して藤枝村と村名を改めたと言う。

数十年前迄は周田三尺余の藤の株が残って居ったと言うが、近年は枯れて藤の新芽が所々に萌ばえて居るだけだ。

天保五年（一八三四―一六六年前）の郷村帳には文化九年（一八七二―一八八年前）石高二五八・一石、文政二年一八一九石で八六一の新田高が見られるが、天保期（一八三三―一六七年前）には荒廃田が相当あったと言う。

明治二年（一八六九―一三二年前）は戸数は社寺共に三五戸、人口一八五、馬六、明治九年（一八七六―一二四年前）に蘆部村と合併、又、岩木川の自然堤防に平安後期（一一八一―一八九年前）の物と思われる土師器、須恵器、土錘、縄文土器、破片を利用した陰絵画をもつ遺物が発見されたと言う。

又、保食神社の境内に天保十年（一八三九―一六一年前）二月十五日「地主法名釋、静正、量知、淨勸、妙子、妙理と太字で刻まれた、約幅二尺、高さ五尺位の石魂が建立されて居る。



古書によると時田は往時には「川口村」と言ったと言うが戸数は数軒より無かったと言う。四代藩主、信政は津軽平野に新田開発をと「肝」に命じ、又、農民の貧困を軽減し領民の人心

の中心で松尾寺の鎮守社として、大宝元年に創建されたと伝えられている。コンピラとは雷鳴に対して琴をかき鳴らす呪術に由来していると思われるが、やがて仏教の影響からガンジス川の鰐を神格化した航海守護神のクンピラと習合し船乗りの尊敬を集めるようになった。

又、各地には金刀比羅講が組織されて民衆の参詣に沸き除災招福の神として幅広く信仰されるようになる。

なお崇徳天皇を祀るのは讃岐国に配流されたおりに金刀比羅に参籠した事があるからだと言う。なお金刀比羅宮の分社数は六八〇〇社と言う。



神原は往時には「浦原」と呼ばれていたと言うが宝永三年（一七〇六―二九四年前）に大洪水があり、金木川付近から現在の所に移転したとの説もあるが、享保十四年（一七一四―二八六年前）に、又、大洪水が有

り集落は全滅したと言うが、現在の神原は其の後の三回目の集落であると言う。

四代藩主、信政は津軽平野に新田開発をと心に決め、又、農民の貧困を軽減し領民の人身安定をと誓い、北限の茫々たる原野に開墾、開田をと基礎工事の構想を練り、其れには岩木川の

安定をと誓い、北限の茫々たる原野に開墾開田をと基礎工事の構想を練り、元禄十一年（一七九八―二〇二年前）頃から金木組十八ヶ村は勿論、秋田（羽後）岩手（陸中）山形（羽前）新潟（越後）などからも人寄せを募り、開拓開田が元禄十一年（一七九八―二〇二年前）頃から盛んに行なわれて享保十一年（一七二六―二七四年前）に「時田」と改められたと言うが、時田は「田に種（粃）を蒔く」と言う意味から、村の開創者、川口伝九郎が地名を名付けたとの説もある。

村の開創者は川口伝九郎、田中要右エ門と伝えられるが元文元年（一七三六―二六四年前）の検地帳には田六七町、畑四町七反とある（四捨五入）

前述にも記したが開拓開田の使役の一人、村の開創者川口伝九郎、田中要右エ門が「時田」に土着したので周辺集落民は往時に用件がある毎に、川口（伝九郎）へ行くと言うので川口村（時田）と自然に集落名の地名が名付けられたと言う説もある。元文年間（一七三六―二六四年前）頃に金木にあった代官所が一時時田に移転されたとの説もあるが理由は不詳との事。

明治十一年（一八七八―一二二年前）田八七町七反、畑一町（四捨五入）戸数五六軒（陸奥国津軽軍村誌より）

時田には「金刀比羅宮が祭神としてあるが、金刀比羅はガンジス川（インド）の航海守護神に由来、コンピラ参りの除災招福神であるが、香川県仲度郡の象頭山中腹に鎮座する「コトヒラ宮」金刀比羅は大物主神と崇徳天皇を祭神とした金刀比羅信仰

堤防、排水、溜池の築堤と新田開発は大事業で、其の為には人寄せを集めるのが先決と金木組十八ヶ村は勿論、秋田（羽後）岩手（陸中）山形（羽前）新潟（越後）などからも人寄せを募り、開拓開田したが、神原や時田の原野は割と平坦地で開田が思ったより「捗り」開拓者は、此処の平坦地は神が授けた原野であると開拓者は住み着いたと言う説があるが「神が授けた原野」であることから誰れ言うとも無く自然に「神原」と地名が付いたとの説もあるが、又、反面大雨が降ると岩木川の水が逆流し、大倉岳から流れる水が金木川の堤防が満杯になるから「涵原はよく水を「被害る原」との説もあるが、どっちの地名が真意かは定かで無い。

又、神原には稲荷神社が祭つてあるが、稲荷神社の主神は宇迦之御魂神で食物、養蚕の農業の神であるが、現代は商業が家業の神として祀つてある。又、仏教では茶枯尼天が狐に乗る姿と混じつており、稲荷を狐とする民間信仰を生んだと言う。

稲荷神社のすぐ隣りに保食神社が（馬頭観音様）祭つて居るが、往時には水田を耕作するのに必要で馬や其の他、馬に頼る以外に方法が無く馬の神（保食神社馬頭観音様）を祭つたと言う説もあるが、何処の集落にも保食神社馬頭観音様が見受けられる。

又、往時には神原の集落より岩木川を跨いで、向う岸の西郡繁田村への「渡し場」が有り、渡し守りは秋元仁太郎（俗に仁太坊）の父親が渡し守りだったと言う。

渡し守は渡賃を馬四文、人間から二文を貰ったと言う、九代藩主、津軽寧親、吉田松陰も神原の「渡し」を利用したと言う説もある。明治四一年（一九〇八）九二年前）神田橋竣工により「渡し場」は廃止されたと言う。

原野を開き 土との闘い



更生部落

昭和八年、県庁内で田村農政課長が中心になり、県内「窓」の大きな家の中に日光が入る新しい住宅を造り、水田五反、畑二町五反、宅地二反位を一戸に与え入植させ、新しい村を造ろうと計画し、喜良市を候補地に見立てた。

入植数十年間は困窮を強いられ農作業は人馬一体、生産基盤も安定しない時期に従来の農業経営、農村制度の欠陥を是正し、新たな土地を求めて理想的農村形態を目指し「昭和更生部落」共同組織によって技術、経済両面の実績を上げるといふ当時としては、画期的な農業モデル事業と言われた。以下は更生部落の開拓史である。

開墾・水利・建物の位置・道路・生産・販売基盤・すべてが住宅は快適、六畳の畳の敷いた部屋と台所・馬屋・作業場・窓が大きいので「日光」が入りとても明るかった。（成田さづさん）

産業組合は昭和二十一年頃、喜良市農協に合併し共同作業や倉庫も出来た。

開墾早々の土地はなにを植えても収穫を上げることが出来ず数年間は自給自足生活・馬鈴薯を植えた所、予想に反して大豊作となり年間に約一万俵の出荷が出来る様になった。

昭和更生部落も終戦を契機に一変し、これまでの自作農資金の返済を部落集会所と共同作業所などを売却して一掃した。

冬は男達が営林署の杣夫として働き、女は縄や「ムシロ」作りで働いた。

昭和四十年頃の軌道に乗るまで入植者達の「心の支え」となったのが、小河正儀長官（知事）の大書きされた「百万一心自力更生」

当時、入植した人達は、田・畠を鋤でおこし、耕耘機もトラクターもブルドーザーも無かった時代、入植当時の苦勞話をして誰一人、耳をかす人は無い。昭和八年県案で創設された昭和更生部落四〇戸が現在では五九戸、五五歳前後が二世、入植当時の三十歳前後が三世となって居り、「土との闘い」を二億円農業と「葉タバコ」栽培に託している。入植当時の人々は現在も親戚以上に付合が続いていると言う。

「当時の青年団長だった、工藤義誠さんは苦勞話は余り聞いた

会議にかけられ決定、喜良市の原野百二十ヘクタールに県下の市町村から入植者を募集、一次二次と九十余名の応募者の中から四十名が選ばれた。

二十五歳から三十五歳迄の農業経験を持つ労働力が一家で三人以上と言う条件で二回も面接した。（桜庭英三さん）

「田五反、畑二町五反に住宅付きが魅力で入植した。自作農資金千百九十円の二十五年償還、はじめのうちは年収も上がらず大変でした。（今 忠吉さん）

昭和九年、これまでの凶作をよそに農業に期待をかけた四十戸が住宅の完成を契機に入植、土づくりの第一歩は開墾作業から始められ、まったくの原野を刈払い当時は日本に数台より無かったと言う六十馬力のトラクターで荒起しをし、後は「トガ」と「マトガ」の農耕具と人の力による手作業、草木のからみついた土の固まりをほごす一家総出の仕事は、自分の土地だとする自覚と収穫の夢を託して延々と続いた。

「昭和九年春、男だけが最初に共同生活をしながら入植し、十月頃住宅の完成を待って一家を構えた。開墾は皆、黙々と働き今では想像もつかない、大根を一番に作付「タクアン」を造り弘前の第八師団に送った。（岡田久吉）

当時一番困ったのは、つらい開墾作業は勿論だが食糧で「イモ」「大根」を混ぜたご飯が主食でおかずは「タクアン」だけだった。

当時は安かった鱈や鮫の魚は正月だけだった（成田泰三さん）

ことが有りません。毎日機械作業を通してでもわかる様な気がします。

時代が変わっても更生部落の農業が有り継承し最善を尽くし農業後継とすると自負した。」

（参考資料Ⅱ平成六十一年九月二十一日発行広報かなぎ『土との闘い』より）

②古文書控帳より 嘉瀬賽の河原・地藏尊

此処ハ始メ附近ノ人家ノ墓所ナルヲ、後ニ赤子等ヲ葬リ居リタルヲ、忠魂碑代リニ日清、日露、大東亞戦争ノ戦死者ノ 霊ヲ祭ル場所トシテ、賽の河原地蔵尊トシテ、今ヨリ百五十年前頃ニ、当地ニ来リタル、廣西坊ガ、小栗崎村ノ松川儀兵衛宅ニ有タル、樺ニテ、田茂木、佛師ノ造リタルモノヲ魂入シタルナリト伝ヘラレテ居ル、佛身約六尺位ナリ。廣西坊ハ後ニ湯ノ沢地藏堂ニ籠リタルト云ウ。

（山中正津氏遺稿）

③歴史散策 金木散歩

八幡宮扁額

金木八幡宮社殿に長利仲聴^{ながりちゅう}謹書の扁額が掲額されてある。

昭和四十四年四月二十日発行青森県人



名大事典に『文政六年（西一八二三年）
明治三十六年（西一九〇三年）の人、
弘前熊野宮宮司、国学者、歌、多くの歌
人や国学者と交わり、また門人も数百人
に及び、能書家でもあった』と書かれて
ある。

十三浜の砂地に埋もれてあった、王朝
の歌人、歌聖といわれた柿本人麻呂ゆか
りの神石を、嘉瀬の人山中龍助氏これ
運び来り、嘉瀬清人溜池の崎の一角に御
堂を建て安置、この崎を嘉瀬では通称

『人丸崎』と呼びなら
して来た。

この神石嘉瀬から金
木に移し、その後その
土地は伏見氏の所有に
移り、たまたま『嘉瀬
ふるさとをさぐる会』
ではこのことを知り、
人丸神石は嘉瀬に安置
すべきだと、伏見氏、
山中氏の了解をとりつ
け、昭和五十三年四月

十九日嘉瀬八幡宮境内に遷座安置したも
のである。

因みに明治十二年春も弥生の候、山中
龍助氏四十二の祝と、人丸神石入魂歌会
が、人丸崎御堂で県下の歌人を集めて催
された。

その歌会の主役を勤めたのが長利仲聴
氏で、巻物の一卷に長利氏が讃書し、四
十二の祝歌が、

◎四十餘り、二葉の松に千代かけて
栄行くへを色そみける

大導寺繁禎

と、齊藤規文、小山内清俊、土門実俊、
宮田充、葛西行庸、菊地廣英、長利龍雄、
下沢保躬など 当時の錚々たる歌人が連
書してある。津軽の辺鄙の地嘉瀬人丸崎
御堂に詠歌されたことは、弘前の歌人と
嘉瀬が交流されてあったことがわかり、
金木八幡宮の扁額を見ることに、歌詠^{うたよ}
みの底流が、金木に流れていることを知っ
た。

（きのした清一記）

嘉瀬観音山をめぐる山中 長三郎

標高六十三メートル、通称観音様、本地名は立山という。



現在の三上高速屋敷内に、
戦後まであった小高い一ツ森
には、古川平内氏の所有時は、
森の頂上の祠に小旗が閃、小
さい鳥居あり、一ツ森古墳と
の説はあったが一ツ森を崩し
た。関係者の話によると、
何も出なかったと述べていた。

山中正津氏はかたりべ誌、ふるさとを探る項目に昭和四十八
年八月、県教育庁文化課の埋蔵文化調査では『嘉瀬遺跡』とし
て一ツ森近くの三十三観音霊場付近の斜面及び金木南中学校付
近の県道より南の一带を調査し、縄文前期の土器は三十三観音
石仏のある斜面から出土し、土師器、須恵器は南中学校付近の

県道南側に散在することが確認されたとしている。

一ツ森周囲は縄文人の文化がふり、弥生人の文化もあった太
古の場所である。観音山の北の麓（三月中旬）を歩くと足跡に
先日降り積もった十七センチ程の厚さの黄色い雪量が現れる。

この雪は遠く隔たる中国大陸黄塵万丈（土煙が空高くのぼる
形容）により、遙かこの観音様の麓に積もった黄色の雪である
とされる。

自然界の摂理を感じながらスキー場の沢を車道に登り観音山
を一廻りすると約千五百歩あった。

車道より南側の麓を沢づたいに一廻りすると同じく約千五百
歩ある。三步で一メートルとすると一千メートルの周囲となる。
車道のない昔は車道の南側にも祠が建つ一帯の山であったと
される。

此の山道の車道を北側の坂を上がると観音山の頂上であり、